

飲水思源

町長

松岡市郎

日本一を目指して！

昨年は、自然災害の多い年であったが、今年はそのような年になるのであるのか。被災地の皆さんの一日も早い復興を期待したい。

一連の災害の状況などを見て、東川町は日本一素晴らしい環境にあると誇りに感じる。自然環境や社会環境などを総合的に考えると、「北海道一」「日本一」といえる最高の条件を有している町なのだ。「おいしい水 うまい空気 豊かな大地」が自慢であるが、豊かな大地はおいしいお米の産地でもある。

J A ひがしかわでは、大雪山のエネルギーとミネラル豊富な雪解け水を使い、おいしいお米を生産している。北海道のエースとして「ゆめぴりか」が注目されているが、東京・東急ストアのプレッセで北海道産の「ゆめぴりか」（北海道産といっても中身は東川産）が昨年末から販売され、東京価格では2キログラム千330円と、新潟コシヒカリよりも高い価格であると聞く。

東京へ出張の折に、さっそく六本木のプレッセへ楽しみに出向いてみたが、残念ながらなかった。世田谷区の方では取り扱われているらしい。魚沼産のコシヒ

カリが1キログラム900円、岩船産の特別栽培米が同720円であったが、「これに次ぐのが東川産米か」などと考へながら店を後にした。

J A ひがしかわでは「日本一売れる米と野菜」を目標に掲げ、生産者とJ A が一体となって頑張っている。最高の水と大地、という環境の中で、生産者の最高の尽力によって育つお米や野菜が「日本一」と評価される時が必ずやって来るだろう。

この素晴らしい環境の中で、私たちも日本一と評価される町づくりを目標としている。日本一と評価されることと日本一お金をかけることはまったく別である。7千900人程度の町の予算規模で日本一お金をかけることができないことは論を待たない。私たちの責務の一つは、次代を担う子供たちに「教育」という素晴らしい財産を残し、「自ら学ぶ心」を持った子供たちを育てることである。

開拓先人は、私たちに町の活力向上のために東川小学校跡地を残してくれている。中心市街地の活性化、東川の顔となる施設利用について、先人に思いを馳せ、未来に向かって多くの住民の皆さんが提案を寄せてほしいものである。夢と希望、活力のある日本一の未来を目指して！

だいせつざんのすがお

大雪山の素顔

山岳ガイド、旭岳ビジターセンター、自然解説員などで活躍する人々をリレーしています。高山植物、紅葉、雪、動物など「自然の大博物館」といわれる大雪山の素顔が見えてきます。

朽ちてゆく避難小屋

本州の主要な登山コースでは、半日から1日行程に一軒または複数の山小屋があり、登山者はそれぞれのペースに応じて宿泊先を選択できる。「山小屋」とはいえ、中には収容人員千人近い巨大なホテル並みの施設もある。山小屋は基本的に営利目的の営業小屋で、寝具や食事の提供はもちろん、生ビールやおでんを食べられたり、自然エネルギーで作った電気でパロク音楽を聞ける山小屋もある。極端な話、お金さえあれば、雨がっぱと水筒だけで山中泊の縦走ができてしまう。

これに対して大雪山の場合、営業小屋は黒岳石室（いしむろ）一軒だけ、他はすべて避難小屋で、シーズン中管理人が常駐するのはこの石室と白雲岳避難小屋のみである。黒岳石室は営業小屋とはいえ、大正時代に建てられた、まさに「石室」で、昼なお暗い小屋内は湿気が多く、お世辞にも快適とはいえませんが、暴風雨が吹き荒れている時でも、小屋内に留まる限りは安

▶トタンが剥がれ、野地板が腐っている忠別岳避難小屋の外観



全が確保されるので、山小屋としての要件は満たしている。

ところが残念なことに、避難小屋としての最低限の要件さえ満たしていない施設が大雪山にはある。表大雪のほぼ中央に位置する忠別岳避難小屋だ。旭岳からトムラウシ山まで縦走する場合、初日に白雲岳避難小屋に泊まり、2日目にヒサゴ沼避難小屋、3日目にトムラウシ温泉へ下山というプランを立てる登山者が多いが、白雲岳避難小屋からヒサゴ沼までは距離が長く、足が遅い人は1日でたどり着くのが辛い。そんな登山者にとって、中間にある忠別岳避難小屋は利用価値が高い。

その忠別岳避難小屋が今、倒壊の危機にひんしている。数年前から屋根のトタンが剥がれて雨漏りしていたのだが、年々これがひどくなり、今年夏には、1階の床が抜けて土台が腐り始めていた。このまま放置すれば数年以内に倒壊するだろう。管理者である北海道（上川総合振興局）は、事態を把握しているはずなのだが、いまだに対策はとられていない。

山樂舎BEAR代表 佐久間 弘